

ウオーシュは利上げをできるか

先週の米雇用統計は予想を超えた力強いものだった。8月の非農業部門の雇用者数が予想以上の増加数だっただけでなく、前月と前々月の数字も上方修正された。労働市場は強く、FEDにとって問題は物価だけだとジャクソンホールで言ったウオーシュの見方を裏付けた。

そこで今週金曜日発表の消費者物価指数（CPI）が重要になる。FOMCは翌週に控える。予想は総合が前年比3.4%増、コアが2.4%増程度だ。コアCPIはコロナ後に比べればかなり低下してきたが、依然としてFEDの目標値2%を超えた水準にある。5年近く目標値を上回ってきた。今回の数字が予想を上回れば利上げの確率は上がる。

直近の金融市場での9月のFOMCでの利上げ確率は60%程度だ。ウオーシュのジャクソンホールでのスピーチ後に利上げ確率が増えて60%になったが、直近も同水準だ。

ウオーシュはインフレが明確に低下傾向にあるか、近いうちに低下するとの確信がなければ手を打つと言った。つまり利上げだろう。

だがウオーシュはCPIだけではなく、彼の任命権者にも配慮する可能性がある。トランプ大統領は雇用統計後にSNSで、強い信用力を持つ国では金利水準が低下する、と発信してFEDに利下げを迫った。彼は執念深い。その点ではトルコのエルドアン大統領と共通だ。彼は以前インフレ抑制のために利下げを中銀に要求した。従わない者は首にした。トルコの場合インフレ下の低金利で通貨リラの下落が続いた。トランプの場合エルドアンほど無茶苦茶ではないが、インフレ水準に見合わない金利水準を維持しようとするれば通貨売りの洗礼を受ける可能性が高まる点では同じだ。

もう一つのポイントは日銀と米財務長官ベッセントだ。日銀の9月の利上げは決定的で、かつ植田総裁は利上げ後の記者会見で金利打ち止め感を出さず利上げ継続を示唆する可能性がある。

そこで FED が利上げをしなければ円安に歯止めがかかり、米長期債市場への影響も食い止められる。ベッセントが望むシナリオだ。

一方 FED が利上げした場合は円安基調が戻り、米長期金利上昇のリスクが高まる。

ベッセントが描くこうしたシナリオはトランプにはもちろんウオーシュにも伝わっているはずだ。

となると、今回 FED の利上げの可能性は市場の大勢に反して低いことになる。これでトランプもベッセントもウオーシュもハッピーになるのか。

否、市場がウオーシュの FED に対する信頼を失う。そうなればドルは売られる。そしてその不信はベッセントの財政運営にも波及する可能性がある。長期債が売られる。もっと大きな禍根に繋がる事も考えられる。